

大阪府茨木市

平成11年度発掘調査概報

平成12年3月



茨木市教育委員会



小銅鐸（A面）



小銅鐸（B面）

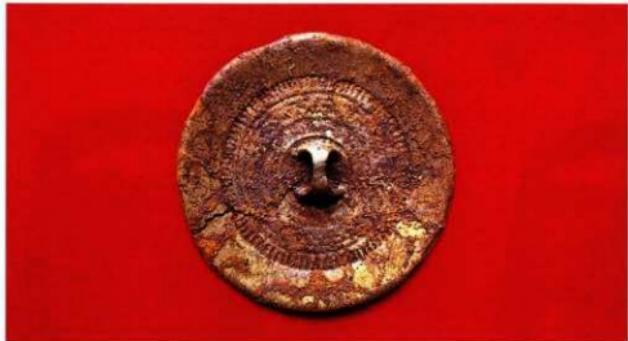


小銅鐸舌（ぜつ）



小銅鐸出土状況

東奈良遺跡出土小銅鐸



小型仿製鏡（裏面）



小型仿製鏡（表面）



管玉・ガラス玉出土状況



小型仿製鏡・管玉類出土状況

郡遺跡出土小型仿製鏡

はじめに

わたしたちのまち茨木市は、大阪府の北東部に位置し、大阪・京都・神戸の間という交通の要衝にあり、東南方には安威川が流れています。そのため、陸上・水上の交通がさかんで、また温かな気候や肥沃な土壌にも恵まれ、古代から多くの人々がこの地を生活の舞台として選び、数々の文化遺産が残されています。

市内には、銅鐸の鋳型の発見で全国的にも知られている東奈良遺跡があります。平成11年には、弥生時代の大きな溝の底から小さな銅鐸も発見されたことから、この遺跡は、当時貴重であった銅を扱うことのできる集落として、重要な役割を果たしていたと考えられます。

他にも、昔のひとびとの暮らしの跡を示すものや貴重な遺物が、市内の各所から発掘調査により発見されています。

このたび、平成11年度中に行った発掘調査についてその概要を記録し、まとめたものがこの冊子であります。

現在も市内で開発工事が進みつつあり、その開発により遺跡がこわされる懸念があります。市民生活の発展のため、やむを得ないものがあるとしても、このような貴重なものを次の世代の市民の方々に伝えていくために記録・保存をしていくことが、わたしたちにとって大切なことを考えて本冊子を編さんするものであります。

あとになりましたが、調査にあたり深いご理解と惜しみないご協力をいただきました関係の皆様に深く感謝いたしますとともに、今後とも本市の文化財の保護・保存になお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申しあげます。

平成12年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 村山和一

目 次

はじめに

例 言

茨木市内遺跡分布図	1
平成11年度埋蔵文化財発掘調査一覧表	2
1. 東奈良遺跡（東奈良二・三丁目、若草町）	3
2. 東奈良遺跡（沢良宜西三丁目）	5
3. 郡遺跡（畠田町）	7
4. 郡遺跡（郡五丁目）	11
5. 中条小学校遺跡（東中条町）	14
6. 中条小学校遺跡（駅前三丁目）	16
7. 太田遺跡（太田二丁目）	18
8. 目垣遺跡（目垣三丁目）	22
9. 溝咲遺跡（学園町）	25
10. 宿久庄遺跡（藤の里二丁目）	27
11. 宿久庄遺跡（豊川一丁目）	30
12. 中河原北遺跡（中河原町）	32
13. 五日市東遺跡（南耳原一丁目）	34

例　　言

- この報告は、茨木市教育委員会が平成11年度に実施した発掘調査事業報告です。
- 平成11年度に茨木市教育委員会が実施した発掘調査に関しては、下記の方々の御協力と御指導・御教示によるもので記して感謝の意を表します。

難波洋三（京都国立博物館）春成秀爾・佐原真（国立歴史民俗博物館）千葉豊・富井真（京都大学）池峯飽彦（堺市立博物館）渡辺昌宏・大野薫・中井直夫・阿部幸一・福宜田佳男（大阪府教育委員会）若林邦彦・鈴木雅美（大阪府文化財調査研究センター）富成哲也・森田克行・宮崎康雄（高槻市埋蔵文化財センター）濱田延充（寝屋川市教育委員会）大庭重信（大阪市文化財協会）西村公助（八尾市文化財調査会）森岡秀人・辻康男・永野香（芦屋市教育委員会）免山鶴（茨木市文化財保護審議会委員）古川久雄（攝陽文化財調査研究所）角南聰一郎（元興寺文化財研究所）（順不同）
- 本書に使用した地図は「国土地理院発行－1/25,000高槻・吹田」・「茨木市地域計画図－1/2500」である。

平成11年度 埋蔵文化財発掘調査事業の概要

1. 平成11年度発掘調査事業

茨木市における平成11年度の発掘件数は15件で、確認試掘・立会調査件数は140件ありました。発掘調査原因の事業別件数は、民間事業11件、公共事業4件で、民間事業が全体の約7割強を占めています。

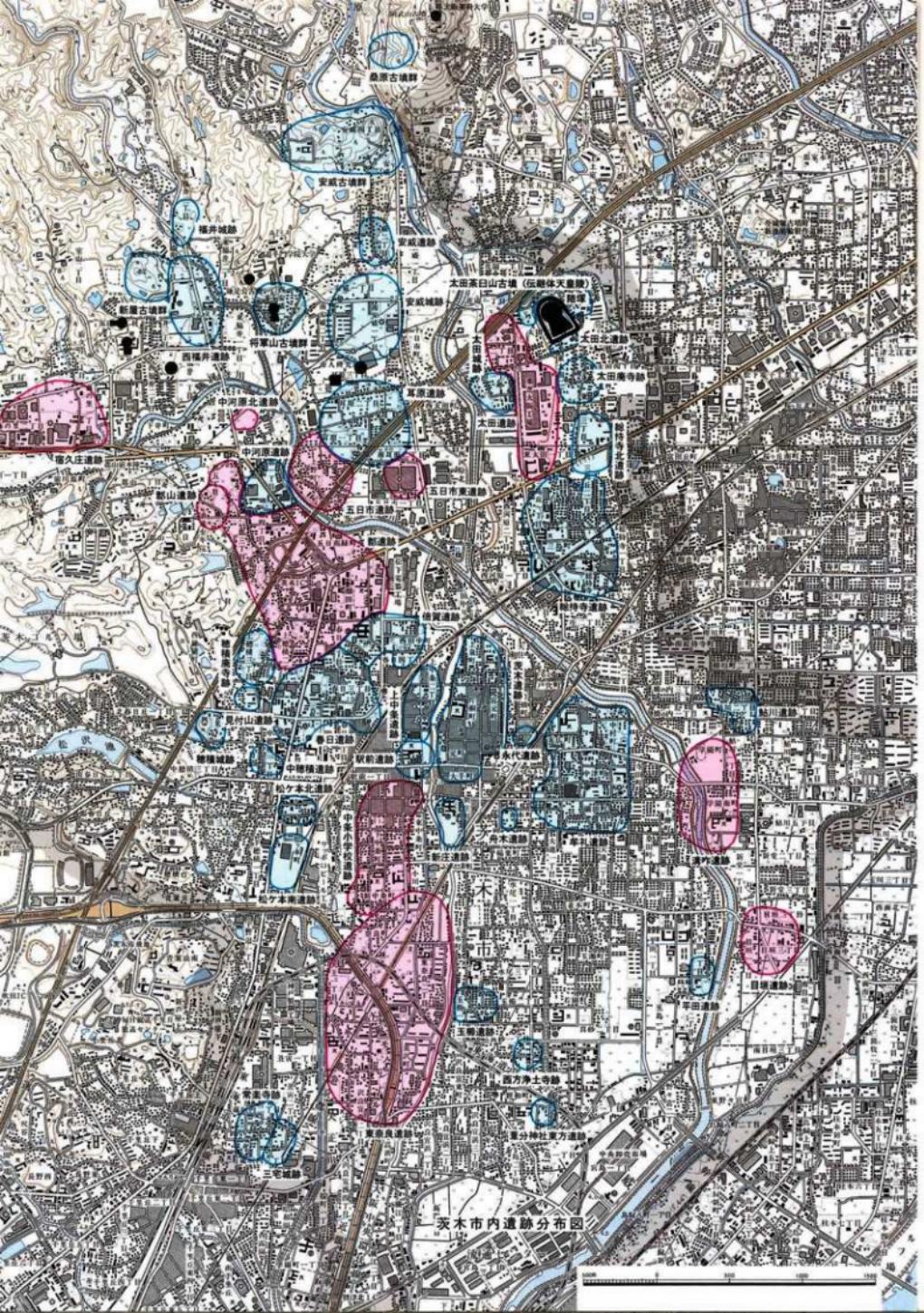
公共事業は、土地区画整理事業、職業安定所立替事業、体育館等建設、コミュニティセンター建設で、民間事業では共同住宅、マンション建設工事や倉庫の新築・立替工事、大型店舗建設などで、今後も社員寮の廃止や田畠の用地転換などによる共同住宅の開発、市内の空地の開発や古いマンションの立替等が進む傾向が続くものと思われます。

2. 平成11年度発掘調査における主な出土品の概要

平成11年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、特に注目すべきは東奈良遺跡の小銅鐸と郡遺跡の小型仿製鏡があげられます。発掘調査で青銅製品が出土すること自体、たいへんめずらしいことですが、同じ年度に続けて銅鐸と鏡が見つかりました。

東奈良遺跡の小銅鐸は、弥生時代中期後半の環濠と推定される溝底から出土していますが、銅鐸そのものの形態及び使用痕跡から弥生時代中期後半より遡るのは確実です。そして、この小銅鐸は日本で同じ溶はんで造られた銅鐸は見つかっておらず、類例も日本よりも朝鮮半島でみられる小銅鐸の系統と考えられ、日本における銅鐸の出現の起源を考えるのに重要な資料となりました。

また、郡遺跡出土の小型仿製鏡は、古墳時代前期初頭前後に日本で中国鏡を真似て製作されたもので、土器棺の副葬品として管玉・ガラス玉と一緒に出土した例は近畿地方で初めてとなりました。



茨木市内遺跡分布図

平成11年度 埋蔵文化財発掘調査一覧表

No.	遺跡名	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容	調査原因
1	東奈良遺跡	東奈良二・三丁目 若草町地内	10. 12. 22～12. 3. 31	7,500m ²	弥生時代～古墳時代 小銅鐸 石器 木器 弥生土器 須恵器 溝 環濠	土地区画整理事業
2	東奈良遺跡	沢良宣西三丁目 715他	11. 3. 16～11. 4. 30	440m ²	弥生時代～中世 瓦器 銅鏡 弥生土器 土師器 須恵器 銭 溝 流路	共同住宅建設
3	郡遺跡	畠田町173他	11. 3. 10～11. 5. 31	774m ²	弥生時代～中世 小型彷彿鏡 管玉 ガラス玉 石器 土器棺 円形・方形周溝墓	倉庫建設
4	郡遺跡	郡五丁目794	11. 9. 1～11. 10. 1	500m ²	弥生時代～近世 弥生土器 土新器 須恵器 陶磁器 土取環 石敷溝 掘建柱建物跡	コミュニティセンター建設
5	中条小学校遺跡	東中条町398-2他	11. 5. 18～11. 7. 17	550m ²	古墳時代 中世 土器 須恵器 溝 流路	職業安定所建設
6	中条小学校遺跡	駅前三丁目434-1	11. 7. 5～11. 8. 6	310m ²	弥生時代中期～中世 弥生土器 須恵器 瓦器 陶磁器 井戸 足跡	共同住宅建設
7	太田遺跡	太田二丁目128-1他	11. 6. 1～11. 7. 23	522m ²	弥生時代～古墳時代 石器 繩文土器 弥生土器 土師器 須恵器 窓穴式住居 掘建柱建物	共同住宅建設
8	目垣遺跡	目垣三丁目284-1	11. 10. 4～11. 11. 5	280m ²	弥生時代中期 弥生土器 溝 柱穴	福祉施設建設
9	溝呂遺跡	学園町地内	11. 2. 15～11. 5. 31 11. 10. 21～11. 12. 15	1,838m ²	弥生時代～古墳時代 溝 土師器 須恵器	体育館建設
10	宿久庄遺跡	藤の里二丁目 1121-2他	11. 5. 28～11. 6. 7	12m ²	弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世 近世 弥生土器 土師器 窓穴式住居 土壤	倉庫増築
11	宿久庄遺跡	豊川一丁目418-1他	11. 6. 10～11. 8. 4	1,200m ²	古墳時代 滑石製防護車 柱穴跡	研究工場建設
12	中河原北遺跡	中河原町62他	11. 6. 10～11. 7. 25	500m ²	古墳時代 畦畔 自然流路	駐車場付工場建設
13	五日市東遺跡	南耳原一丁目83-1	11. 11. 29～12. 1. 21	1,891m ²	繩文時代後期～近世 石器 繩文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 自然流路 落ら込み	倉庫建設
14	五日市遺跡	五日市二丁目 107-1他	11. 5. 7～11. 5. 8	20m ²	奈良時代～中世 土師器 須恵器 陶磁器 溝 柱穴	共同住宅建設
15	宿久庄遺跡	藤の里一丁目 171-1他	11. 10. 14～11. 12. 18	4,000m ²	弥生時代 古墳時代 中世 近世 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器 掘建柱建物 井戸 石組み造溝 水田跡 土壤 柱穴	店舗建設

No.14, 15 については後日の報告とします。

東奈良遺跡

所在地 茨木市東奈良二丁目・三丁目、若草町地内
開発事業 土地区画整理事業
調査期間 平成10年12月22日～平成12年3月31日
調査面積 約 7,500m²
調査担当 奥井哲秀
調査結果

東奈良遺跡は、茨木市南部の標高6～7mの沖積平野上に位置し、昭和48年から翌年にかけて発見された銅鐸や銅戈・勾玉の鋳造関係の遺物が出土したことで有名となった市内最大の遺跡で、弥生時代前期（B・C 3～4世紀）からはじまる中心的な遺跡である。

これまでの調査から、集落の盛んな時期は大きく分けて、弥生時代前期と中期後半そして後期から古墳時代前期の三つの時期に、人々が多く住んでいたと考えられている。

今回の調査区は遺跡のほぼ中心部にあたり、弥生時代前期の環濠（集落を巡る溝）が3条、中期の環濠が1条、中期から後期にかけての溝が2条、それ以降の溝が数条のほか、人々が住むための竪穴住居跡4基以上、無数の柱穴、土壙、木器溜め土壙、方形周溝墓、木棺墓、井戸、貯蔵穴などの遺構や、煮炊きや貯蔵用として使われた壺・甕や高杯・鉢などの土器類、いろいろな道具を作るための磁石・斧、穂積みのための石包丁、狩猟用の鏃などの石器類、農耕などのための鋤・鍬などの木器や作りかけの木器類、食用とした貝や動物の骨などが遺物収納箱にして、約3,000箱の遺物が出土している。

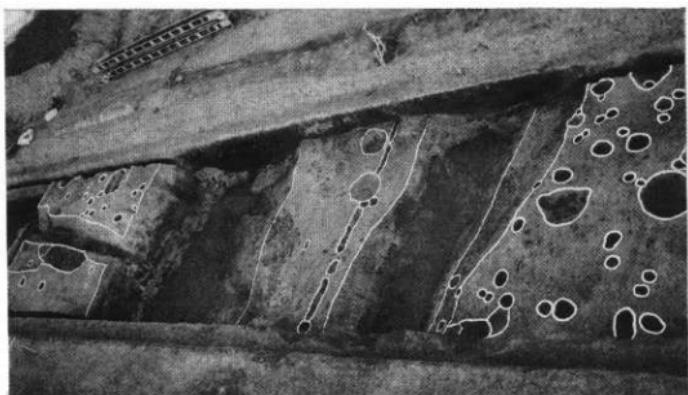
また特殊な遺物として弥生時代中期後半の溝の底から、小さな銅鐸が捨てられたような状態で出土している。（巻頭写真）

この小銅鐸は完全な形で残っており、その大きさは、高さ14.2cm・最大幅9.1cm・底部短径7.9cm・舞部（身の頭部）4.4×6.5cm・紐厚み5mm・重さ750gの小さなものである。特徴としては、鐸身の画面に紋様があり、内部に舌（ぜつ）が伴っていることである。

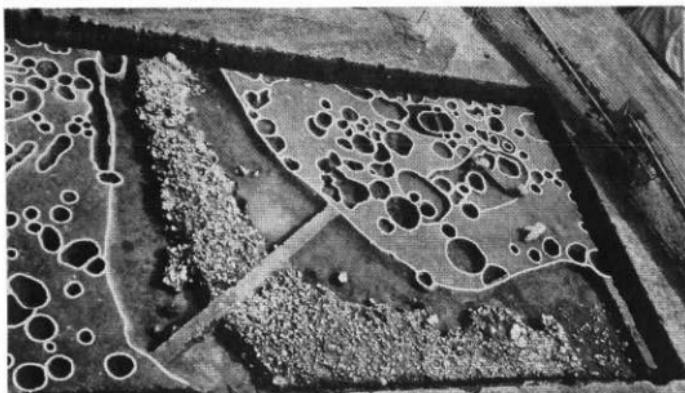
銅鐸を振ると、振り子のようになった舌が内面の突帯にあたり、澄んだ金属音が鳴る。この銅鐸には内面の突帯がかなり磨り減っていることから、長い間、実際に音を鳴らしていたものと考えられるものである。

これまで日本で発見されている小銅鐸は、一般的な銅鐸を模倣したものがほとんどであるが、今回発見された小銅鐸は、その形状や大きさなどから、朝鮮半島でみられる小銅鐸の系統をもつものと考えられ、銅鐸の謎を考えるうえで貴重な資料となった。

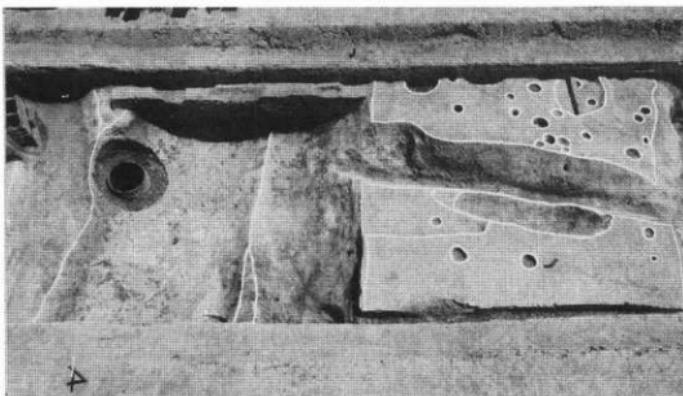




東奈良遺跡・弥生時代前期環濠



東奈良遺跡・方形周溝墓状遺構（弥生時代中期）



東奈良遺跡・小銅鐸出土環濠（弥生時代中期後半）

東奈良遺跡

所在地 茨木市沢良宣西三丁目715、716

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成11年3月16日～4月30日

調査面積 約440m²

調査担当 中東正之

調査結果

調査地は、東奈良遺跡の周知の包蔵範囲の南西部にあたる、沢良宣西土地区画整理地区内に位置する。地区内では、平成6年に区画整理事業に伴う発掘調査が実施され、平成7年からは共同住宅建設に先立つ発掘調査が実施されてきた。当地の隣接地に関して

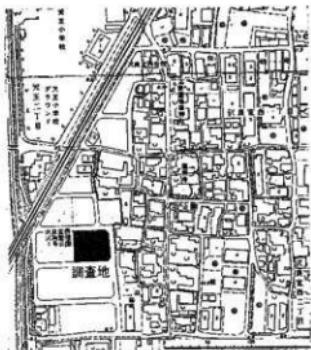
は、当初相次いで数件の調査が実施されている。その調査の結果、周辺地域全般に広がる中世の遺構面が確認されているほか、当地の南側と北側で平安時代後期の井戸や建物跡など、西側では、弥生時代後期の方形周溝墓が検出されている。平成11年2月、当地で共同住宅建設に先立つ試掘調査を実施したところ、包含層を確認した為、建築予定範囲を対象に、発掘調査を実施することになった。

当該地の土層の堆積状況は、現地表面下、耕土(20cm)、床土(10cm)、褐灰色砂質土(30cm)、灰色砂質土(40~60cm中世包含層)、明黄褐色粘質土(20~40cm第1検出面)となる。以下は、流路及び植物遺体を含む湿地状の層位が複雑に堆積(50~130cm)し、地山層である明黄褐色粘土(第2検出面)に至る。

第1検出面は、埋没流路等の軟弱な地盤に成立するが、溝7条、土壤1基、柱穴・小穴10個を検出した。各埋土内からは全く遺物が出土しなかったが、南側隣接地で検出された平安時代後期の遺構面に連なるものと判断される。柱穴は、建物等としてまとめることはできなかった。

流路は、幅約11m、深さ1~1.5mであり、調査区内で数10cmの高低差をもって北から南に流れれる自然流路である。溝肩が判然としないため、砂礫層・砂質土層などの埋土を湿地堆積とともに地山層(第2検出面)までいききに掘り下げ、溝底部のみを検出した。埋土内からは、9世紀代の皇朝十二銭3種類、12世紀初頭頃の瓦器碗・土師皿・須恵器小皿などが一括出土したのをはじめ、弥生時代後期から平安時代の角が取れて丸くなった土器片が溝内に散在した。

第2検出面では、ほぼ北西から南東に屈曲しながら走る、谷状に落ち込んだ自然地形が検出されたが、調査区内でその全容を把握することはできなかった。西側隣接地の弥生時代後期の遺溝面においても、これに連なる落込みが確認されている。西側隣接地の遺溝面からみて、落込みの深さは約1.5mである。底部には人の足跡とみられる痕跡が複数みられたが、土器等の遺物は出

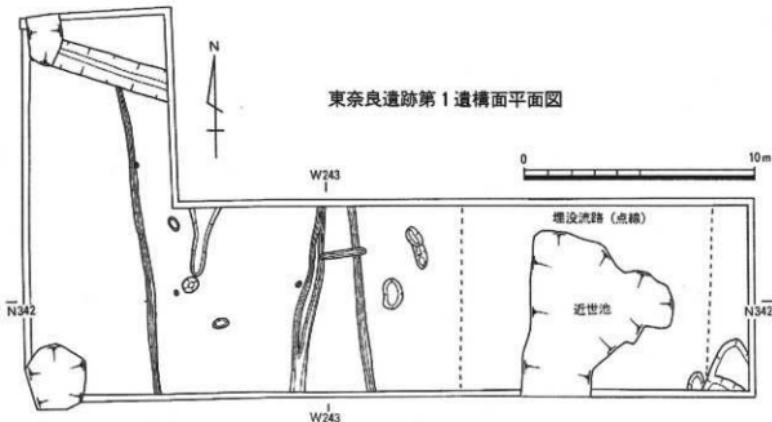


土しなかった。

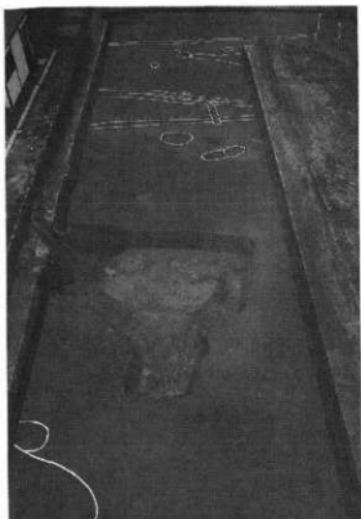
遺物は、埋没流路出土の土器類が大半を占める。総量は整理箱4箱である。

隣接地の調査結果から、弥生時代後期の方形周溝墓や平安時代後期の建物を含む遺構の検出が期待されたが、当地では、平安時代後期頃に居住域となるまで、低湿地および流路であったと判断される。居住域としても、湿润な状況が続いていた為か、遺構の密度は薄く、建物は認められなかった。流路内から出土した銅鏡や瓦器類は、地鎮等の祭祀が想定される。

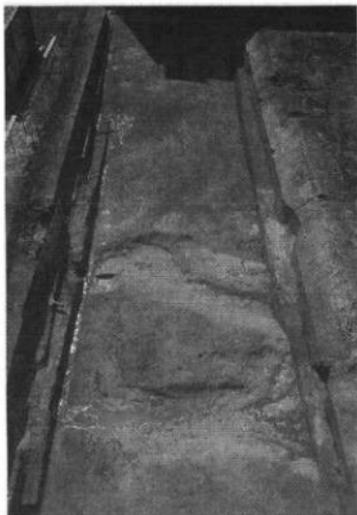
註1) 隆平永寶(初鋤年796年)、富壽神寶(初鋤年818年)、寛平大寶(初鋤年890年)



東奈良遺跡第1遺構面平面図



東奈良遺跡第1遺構面全景(東から)



東奈良遺跡第2遺構面全景(東から)

郡 遺 跡

所在 地 苺木市畠田町173, 183

開発事業 事務所兼倉庫建設

調査期間 平成11年3月10日～平成11年5月31日

調査面積 774m²

調査担当 濱野 俊一

調査結果

郡遺跡は、名神高速道路苺木インターチェンジを中心に広がる弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。遺跡の発見の端緒は昭和29年に郡神社南側の郡児童公園を造成中に弥生土器が発見されたことによる。その後、名神高速道路建設時には小規模な発掘調査が実施された。昭和48年には苺木インター チェンジの南側の上穂積で約20,000m²の発掘調査が実施され弥生時代の方形周溝墓や古墳時代後期の埋没墳などが広範囲にわたって検出されている。

昭和53年には苺木市立畠田小学校建設にともなった発掘調査によって遺跡の範囲が、畠田町まで広がり、その後の苺木市立中央図書館そして住友セメント跡地の物流倉庫に伴う発掘調査によって西田中町を中心に広がる倍賀遺跡と一帯化することとなった。今回の発掘調査地点は郡遺跡の南端にあたり、春日遺跡そして倍賀遺跡に隣接する。

当該地はかつて休耕田であり、旧耕作土、床土直下には中世の遺物包含層である黄灰色砂質土そして弥生時代から古墳時代～奈良時代までの遺物を含む暗褐色粘質土が堆積している。方形周溝墓・円形周溝墓・溝・土壤等の遺構は地山層である黄色粘土層上面の同一面にて検出されている。

今回の調査地点で、もっとも古い遺構としては、弥生時代中期後半の方形周溝墓2基と溝が一条検出されている。次いで、古墳時代前期初頭の円形周溝墓及び溝そして土器棺墓が3基である。その後、古墳時代後期の竪穴住居跡1基、奈良時代の掘立柱建物等も検出されている。上記以外に、多数の柱穴が検出されているため、掘立柱建物跡に関しては、今後の検討によって増加する可能性が高い。

検出された遺構のうち、特筆されるのは、古墳時代前期初頭の円形周溝墓と小型仿製鏡と管玉・ガラス玉を副葬した土器棺墓があげられる。

円形周溝墓は、直径約20mで、一部、東側は調査区外に延びている。墳丘部は後世に削られて残存していない。周溝墓部分は残っており、一定間隔をおいて供獻用(祭祀用)土器群が確認され、特に、土器棺が北東端の周溝墓内に埋置されていた。円形周溝墓の発見例は市内においては、



東奈良遺跡・總持寺遺跡に次いで3例目であり、郡遺跡においては初例となった。いずれも、弥生時代後期中頃から古墳時代前期初頭に多く作られたものである。

また、今回の調査地点において土器棺墓が3基検出されているが、そのうち、一基では小型仿製鏡と管玉・ガラス玉を副葬していた。壺棺墓は西側調査区の中央部北側で2棺が埋葬の前後関係をもって検出された。小形倣製鏡と管玉・ガラス玉を副葬していた壺棺墓は北側で、本来存在していたはずの盛土部分と土器棺墓上半部の大半が中世の水田開発に伴って削られて失われていた。土器棺墓の埋納壙の規模は東西約70cm、南北約70cm、残存する深さは85cmで、楕円形であった。埋納壙の正確な掘方は、断面観察からは、明確には確認できなかったが、ほぼ棺身に接して掘られていることが判明した。棺身に使用されていた土器は、二重口縁壺と推定される大型壺で、意識的に口縁部を打ち欠いており、別の片口の大型鉢で打ち欠いた口縁部で覆っていた。棺内には土圧で落ち込んだ土や土器で充満しており、上記の落ち込んだ土や土器を除去すると、棺身に貼り付く様な形で小型仿製鏡1点と約10点以上の管玉・ガラス玉が一か所にまとまって副葬されていた。管玉・ガラス玉の数から腕飾り程度のものと考えられる。これらの副葬品の出土状況から被葬者の頭位は西と考えられる。

出土した小型仿製鏡は重圓文鏡の小型仿製鏡と考えられる。紐孔断面は方形となり、内区（中央に近い部分）には数条の圓線が巡る。また、不鮮明ながら、内区と外区（縁に近い部分）の境に鋸歯文が認められる。

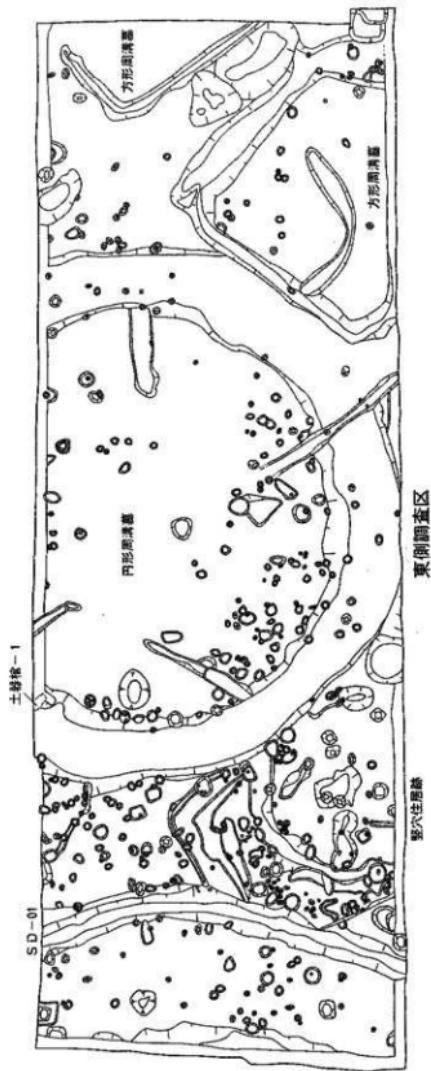
外区には櫛歯文帯があり、縁は平縁となっている。直径は12cmで、重さは36gであった。

ガラス玉はスカイブルーで、直径は4~5mmである。管玉は、碧玉製と綠色凝灰岩（グリーンタフ）製の2種類がある。碧玉製の管玉は平均の長さ6mm、綠色凝灰岩（グリーンタフ）製の管玉は平均の長さ9mmと5mmの2種類がある。

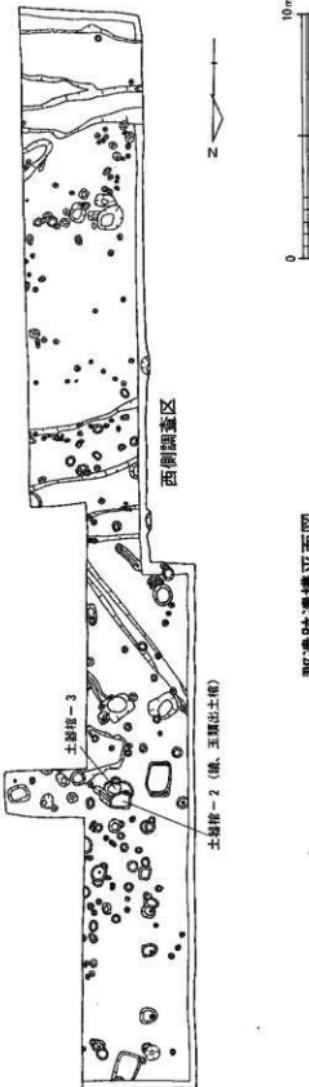
他の出土遺物としては、弥生土器、須恵器、土師器が主体を占め、他に石器として、サヌカイト製刃器、剥片や粘板岩製の磨製石剣の破片や磨石が出土している。また、土器棺に副葬されていたと思われるガラス玉や管玉が古墳時代後期の溝からも出土している。

まとめ

今回の発掘調査によって検出された鏡と管玉・ガラス玉を副葬した土器棺墓は近畿地方では初例であり、全国的に見ても鏡を副葬した土器は棺墓となると鳥取県について2例目である。従来、近畿地方では幼児または乳児を埋葬したと考えられてきた土器棺墓には副葬品があることが稀である。今回の調査地点でも今回の土器棺以外には副葬品がまったくなかった。特に今回、出土した小型仿製鏡の大半が集落の溝や住居跡から見つかっていることを考えると、今回の鏡や管玉・ガラス玉の副葬例は、この後の古墳時代前期の前方後円墳の主体部、多量の鏡を副葬する習慣が近畿地方を中心に広まっていたことの重要な手掛かりになるものと思われる。



東側調查区



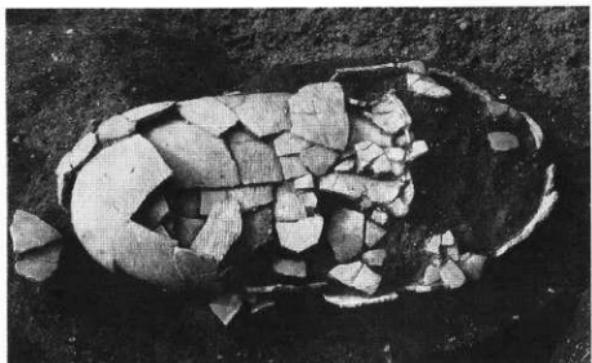
都遺跡遺構平面図



郡遺跡東側調査区遺構面全景（南から）



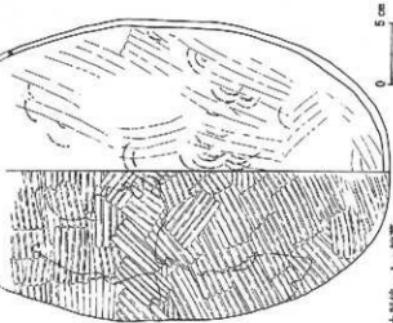
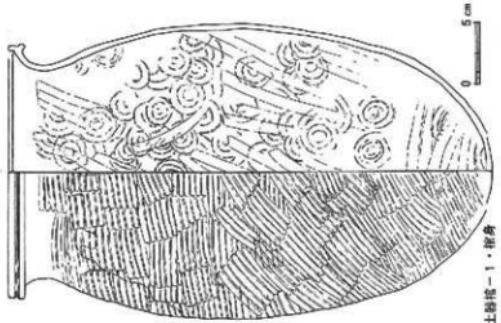
郡遺跡西側調査区遺構面全景（北から）



郡遺跡土器棺-1、円形周溝内出土状況（南から）



郡遺跡 S D - 01 土器出土状況（西から）



郡遺跡出土土器棺-1、土器実測図

郡 遺 跡

所 在 地 茨木市郡五丁目794
開発事業 コミュニティセンター建設
調査期間 平成11年9月1日～平成11年10月1日
調査面積 500m²
調査担当 濱野俊一・中東正之
調査結果

当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の郡遺跡及び郡山遺跡にまたがり、地形的には千里丘陵の北東端にあたり、緩やかな中位から低位段丘が西から東に向かって延びている。区画整理事業以前は地形に沿った棚田を形成していた。今回の調査は、当該地一帯の区画整理事業に伴って区画道路部分（下水管埋設部分）の発掘調査から始まった一連の調査である。



調査地点の周辺遺跡の状況は、区画整理事業が実施される以前は乏しく、郡児童公園付近において実施された小規模な発掘調査の成果と茶臼塚（馬塚）が古墳であることと、同古墳の墳丘上に室町時代の石造品が点在していること以外まったく判らなかった。

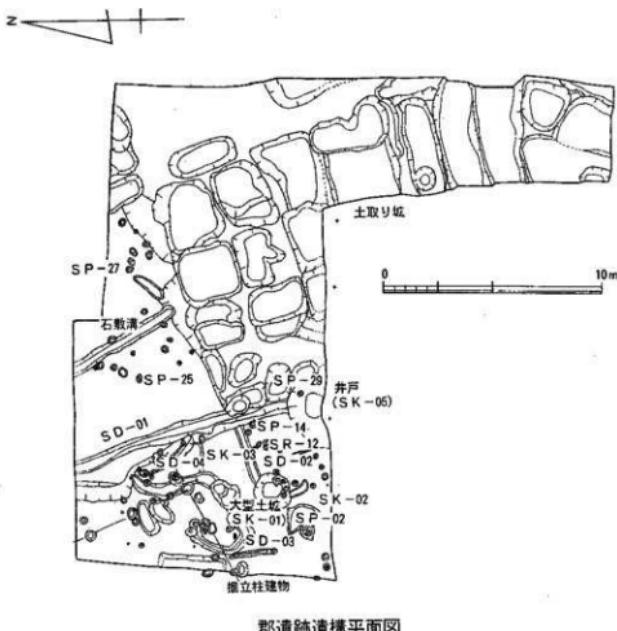
平成6年3月から始まった区画整理事業に伴う一連の発掘調査の結果、縄文時代晚期の土器が自然流路から若干出土しているが、本格的に集落形成を始めるのは弥生時代中期前半である。そして、弥生時代中期後半段階になると大溝や方形周溝墓等を形成して集落の最盛期を迎えることが判明している。その後、再び集落が大きくなるのは奈良時代と中世前半である。当該地近辺は、奈良時代になって山陽道等の官道の整備がなされ、後後に亀岡街道と西国街道と呼ばれる両街道が交差する付近にあたることになった。このため、奈良時代から中世にかけて連続と集落形成が行われ、特に12世紀後半から13世紀後半にかけての遺構・遺物が一番多いことが判明している。

今回のコミュニティセンター建設に伴い発掘調査を実施した。調査区の大半が中世末に実施されたと推定される土取りによって破壊されて、調査区の西側のみ遺構が残存していた。検出した遺構としては、調査区西部では調査区外に延びるため正確な建物規模は不明だが2間×2間以上の掘立柱建物を1基検出した。また、完形に近い瓦器^{がめい}碗が埋納されていた柱穴等（S P-29）も検出されている。これらの調査区西部で検出した遺構の時期としては出土している瓦器碗や土師皿から12世紀後半から13世紀後半にかけての遺構群と推定される。また、弥生時代の遺構として井戸（S K-05）、溝（S D-03）、大型土壙（S K-01）が検出されており、井戸からは柱状片刃石斧^{かくねいしのく}そして大型土壙と溝からは弥生時代中期の土器が出土している。調査区の中央部南側か

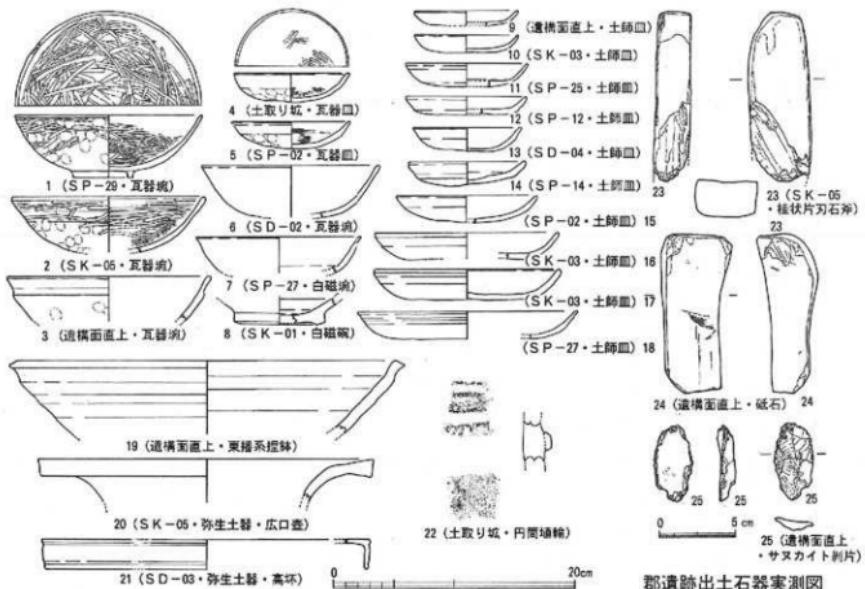
ら東部そして南部にかけては中世末に実施されたと推定される土取り壙が検出された。土取り壙は平均2~3m四方の正方形または長方形である。土取り壙は大阪層群と推定される地山層の黄色粘土層を掘り抜いており、その下部の黄色砂質土層上面で止っている。そして土取り壙の埋土は弥生時代を中心とした遺物包含層と地山層の黄色粘土層が交互に堆積している。土取り壙の埋土からは茶臼塚（馬塚）に伴うものと思われる円筒埴輪片や弥生土器片や瓦器皿が出土している。上記以外の造構としては調査区の中央部北側において石敷溝が検出されている。同溝は河原石を敷いており、竹管痕跡を残しているため導排水用の暗渠の可能性が高い。出土遺物は摩滅した中世平瓦片しか出土しておらず、所属時期の確定は難しいが中世末に実施された土取り壙によって一部切られているため、土取り壙形成時期と大きく変わらない時期の所産と思われる。

まとめ

今回の発掘調査によって当該地における弥生時代中期以降の土地利用の変遷が明らかになった。特に、12世紀後半から13世紀後半の掘立柱建物を中心とする建物群が検出された所は後世の亀岡街道と西国街道を眼下に観む地点に位置し、今後、検討を要する施設になる可能性が高いと思われる。



郡遺跡構造平面図



郡遺跡出土土器実測図



郡遺跡調査区全景（西から）



郡遺跡中世末土取り拵検出状況（北から）



郡遺跡堀立柱建物検出状況（西から）

中条小学校遺跡

所在地 茨木市東中条町398-2他

開発事業 職業安定所新築工事

調査期間 平成11年5月18日～7月17日

調査面積 550m²

調査担当 横山成己

調査結果

中条小学校遺跡は千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した扇状地に立地する集落遺跡であり、過去の調査によって弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡であることが判明している。今回の調査地は從来の埋蔵文化財包蔵地の北東端にあたり遺跡範囲外の地点であったが、試掘調査によって中世の包含層および古墳時代の遺構が確認されたため発掘調査を行った。

調査は排土の処理の問題から調査区の北側半分の調査後に南側半分を調査する予定であったが、北側調査時点で調査区の東側の大部分が現在も調査区の東側に流れている小川水路（藏替川）の旧流路であることが確認されたため、南側調査区については西側のみを精査し、東側は重機掘削で旧流路の堆積状況を把握するにとどめた。

調査の結果、遺構が確認されたのは旧流路によって削られていない西側の幅5mの範囲である。調査区西側の土層の堆積状況は造成土、耕土、明灰色粘質土層、暗灰色粘質土層、明黄褐色粘質土層であり、暗灰色粘質土層は中世の土器を包含しており、遺構は明黄褐色粘質土層に形成されている。

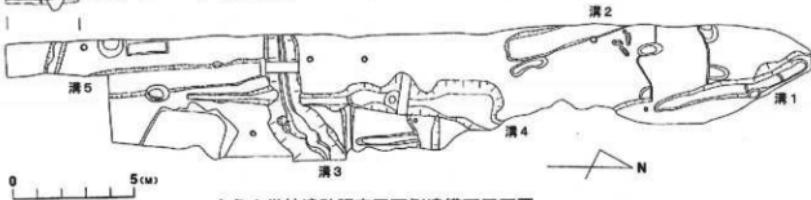
遺構としては、溝状遺構と柱穴が検出された。その内、溝1、2、4、5は南北方向に走る溝であり、溝3は東西方向に走る溝である。南北方向の溝では溝1、2、5が北から南に向かって底面が下がるのに対し、溝4は南から北に向かって深まる溝である。また断面Y字状の溝3は西から南に深まっている。

各遺構からの出土遺物は極めて少なく、また細片であるために遺構の時期の特定は困難であるが、溝1からは古墳時代後期の須恵器片が出土している。また溝1、2、5は方向及び埋土の質の類似から同時期の遺構であると推定される。

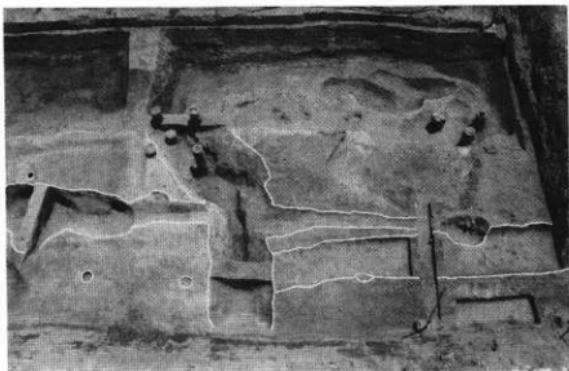
今回の調査の結果、本調査区では包含層、遺構からの弥生土器の出土がなく、古墳時代、中世の遺物のみが確認されたということで、中条小学校遺跡の北側での性格が改めて確認されたと言える。



1. 造成土
 2. 細土
 3. 明灰色粘質土
 4. 暗灰色粘質土



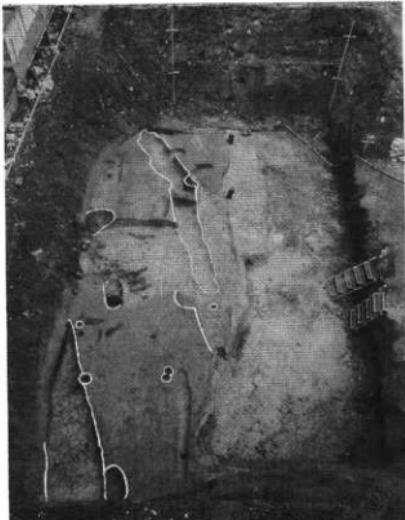
中条小学校遺跡調査区西側遺構面平面図



中条小学校遺跡南側調査区全景（西から）



中条小学校遺跡南側調査区全景（北から）



中条小学校遺跡北側調査区全景（南から）

中条小学校遺跡

所在地 茨木市駅前三丁目434-1

調査原因 共同住宅建設工事

調査期間 平成11年7月5日～8月6日

調査面積 約310m²

調査担当 中東正之

調査結果

調査地は、中条小学校遺跡の包蔵範囲の北側に隣接する。当地周辺の既往の調査では、中世包含層が同様に検出されているのをはじめ、弥生時代後期から古墳時代前期初頭の包含層・遺構面が検出されている。平成11年5月、当地において試掘調査を実施したところ、敷地の南側において、古墳時代及び中世の包含層を確認した為、建築予定範囲の南半部を対象に、本発掘調査を実施することになった。北半部については、幅2m南北15mのトレチ（調査坑）を設定し、地山層上面と断面の観察を実施した。

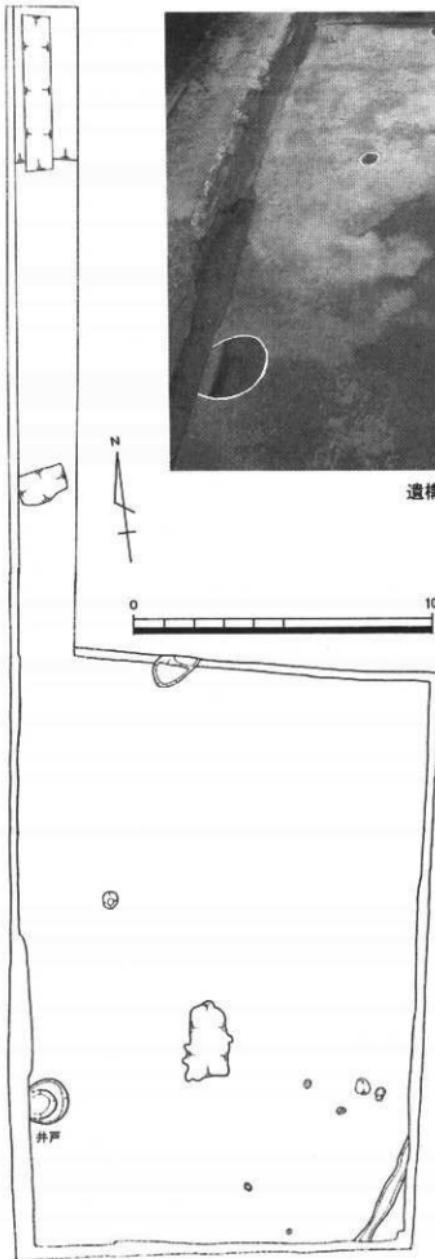
土層の堆積状況は、現地表面下、現代盛土（50cm）、旧耕土（10～20cm）、灰黄色土（約20cm中世包含層）、暗褐色粘質土（約10cm古墳時代前期の包含層）、明黄色褐色粘質土（地山層）となる。明黄色褐色粘質土上面で遺構検出を実施した。トレチ調査では、中世包含層がほぼ削られた状態にあることが判明した。古墳時代の包含層は、途中で消失し、遺構は検出されなかった。調査区の遺構面下には、東西方向の埋没流路が存在することも判明したが、その全容を解明することはできなかった。

検出遺構は、溝1条、井戸1基、土壤1基、柱穴・小穴6個、足跡多数である。時期は、古墳時代前期初頭と判断される。溝は、幅50cm、深さ10cm、検出長4m以上である。埋土内より庄内式土器が出土した。井戸は、埋没流路上に成立する。直径1.5m、深さ40cmで、二段の掘り方の状態であった。遺物は出土しなかった。土壤は、短軸1m、深さ40cmで、調査区外に至るため全容は不明である。遺物は出土しなかった。柱穴類は、建物などとしてまとめることはできなかった。

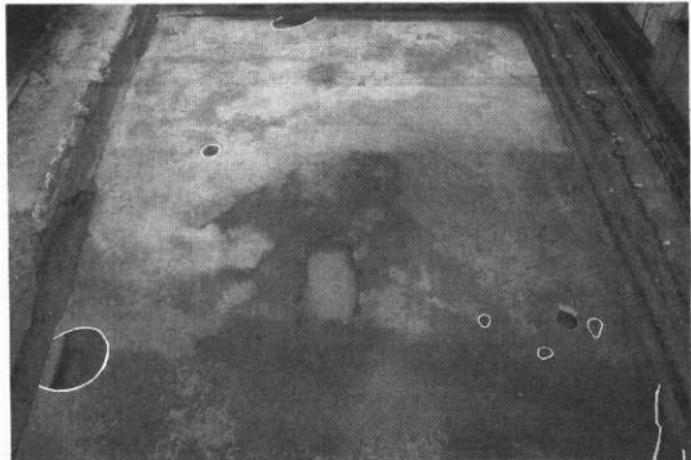
遺物総量は整理箱1箱で、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶磁器類などがある。

調査の結果、当地では、古墳時代前期初頭頃の遺構面が検出された。周辺の既往の調査結果と合わせると、この時期の中条小学校遺跡の範囲は、最大に広がったか、もしくは南側に中心部を移したものと考えられる。当地に関しては、流路廃絶後、居住域に取り込まれたが、湿潤な状況が続いている為、遺構密度の低い地区であったと判断される。また、中条小学校遺跡の北方に位置する古墳時代の包蔵地である駅前遺跡とも、端を接する地区であったと考えられる。

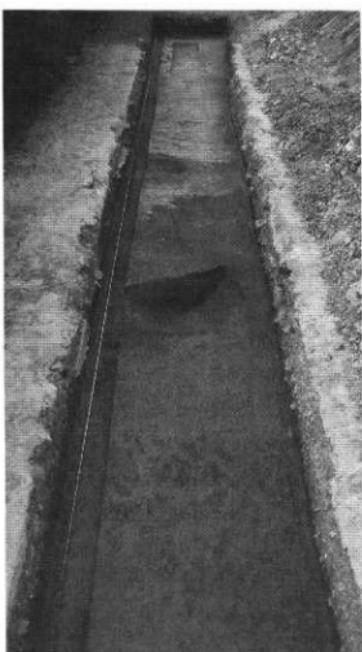




中条小学校遺跡遺構平面図



遺構面全景（南から）



中条小学校遺跡北半分トレンチ検出状況（南から）

太田遺跡

所在地 茨木市太田二丁目128-1・129-1
開発事業 マンション建設
調査期間 平成11年6月1日～平成11年7月23日
調査面積 522m²
調査担当 濱野俊一
調査結果

太田遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落遺跡である。遺跡としては、太田遺跡の東側に立地する飛鳥時代後期に創建された太田廃寺があり、明治40年に舍利容器一具を納めた花崗岩製塔心礎が開墾中に出土している。また、付近からは単井蓮華文の軒丸瓦等が採取されているが、伽藍配置等の実態は不明である。また、太田遺跡の西側には中世の太田城が存在していることは知られている。特に、太田遺跡の集落部分の調査では昭和48年に大阪府教育委員会が遺跡の南部において発掘調査を実施しており、弥生時代後期の遺構及び奈良時代の掘立柱建物が検出されている。

その後も太田遺跡の南部を中心に発掘調査が実施されたが、今回の調査地点周辺地域は周知の遺跡の範囲外であった。そして平成6年から平成10年まで名神高速道路拡幅工事に伴う発掘調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡12基、古墳4基、飛鳥・奈良時代の掘立柱建物跡20基余、平安時代の溝や倉庫跡が検出されている。

今回の調査地点は、名神高速道路拡幅工事に伴う調査地点の南側に位置している。当該地の土層の堆積状況は耕作土・床土直下には中世の遺物包含層である黄灰色砂質土そして弥生時代から古墳・奈良時代までの遺物を含む暗褐色粘質土が堆積している。弥生時代後期から中世までの遺構は地山層である黄色粘土層及び黄色礫混粘質土層上面の同一面で検出されている。

検出された遺構としては、弥生時代後期後半の竪穴住居跡3基、古墳時代後期（6世紀後半から末）の掘立柱建物跡5基、及び埋土中に焼土・炭が混じる方形土壤等や排水用と考えられる溝等が検出されている。上記以外に、多数の柱穴を検出しているため掘立柱建物跡に関しては、今後の検討で増加する可能性が高い。

特筆されるのは、調査区中央部で検出された弥生時代後期後半の竪穴住居跡（SH-01）である。SH-01の建物規模は、一辺が3m程度で、軒丸方形の小型の竪穴住居である。床面中央に炉を設置しており、主柱穴は周壁溝沿いに2か所のみ検出された。

この2か所の柱穴以外は、後世の古墳時代後期（6世紀後半から末）の掘立柱建物跡に伴う柱穴である。出土遺物としては、床面直上で作業台と考えられる偏平な石以外は弥生土器だけで、



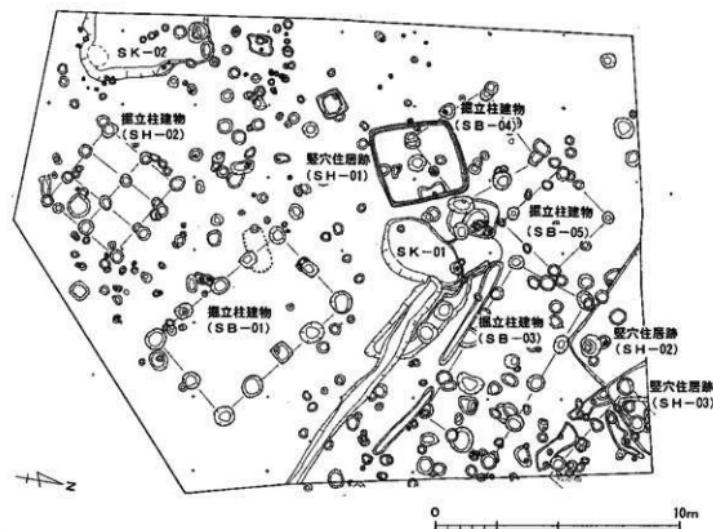
炉の周辺と東側の周壁溝沿いに集中して出土している。また、竪穴住居跡の埋土の堆積状況から、多量の弥生土器と石塊が投棄された状態で検出されているため、竪穴住居跡が破棄された後廃棄土壤（ごみ穴）として利用されたものと思われる。

今回の調査の出土遺物としては、弥生土器・須恵器・土師器が主体を占め、鐵鎌や鐵鏟と推定される鐵器が方形土壙等や柱穴から出土している。また、遺物包含層中ながら、少量の縄文後期の土器片や風化の著しいサヌカイト剝片が一定量出土している。

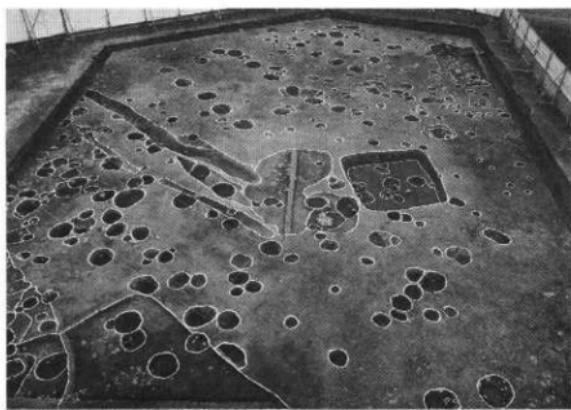
まとめ

名神高速道路拡幅工事に伴う発掘調査で、弥生時代後期後半の竪穴住居跡が当該地の北側の調査区（G 2 区）で 8 基検出されているが、今回の調査で弥生時代後期後半の集落が南に延びることが判明した。また、太田遺跡では古墳時代の集落跡は主に 5 世紀後半の掘立柱建物を中心とした集落跡が検出されているが、今回の調査区で検出された 6 世紀後半から末にかけての掘立柱建物群は、倉庫と推定される総柱の掘立柱建物を含めており、太田遺跡では当該期の集落跡の検出は、名神高速道路拡幅工事に伴う発掘調査例を合わせると相当規模の集落が長期間展開していたものと思われる。また、集落の当該期の中心部は、調査区の南東部方向に広がっていることも判明した。

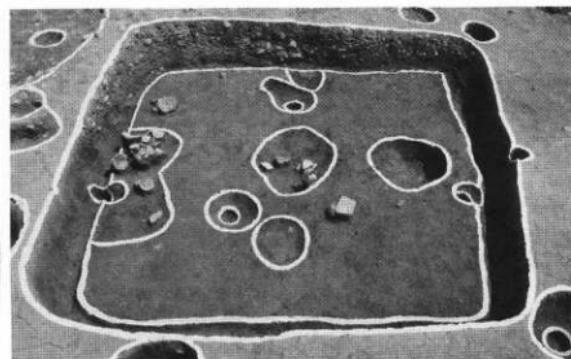
註) 名神高速道路内遺跡調査会「中央自動車道西宮線拡幅工事に伴う太田遺跡発掘調査報告書」平成10年12月



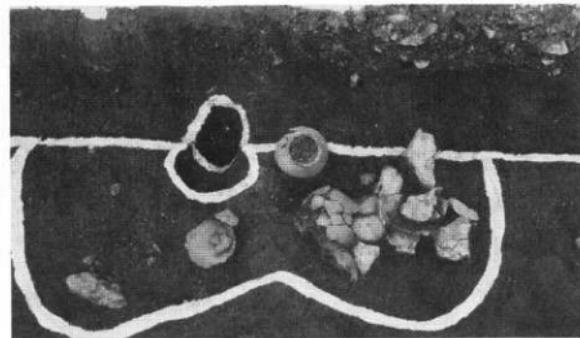
太田遺跡造構平面図



太田遺跡調査区全景（北から）



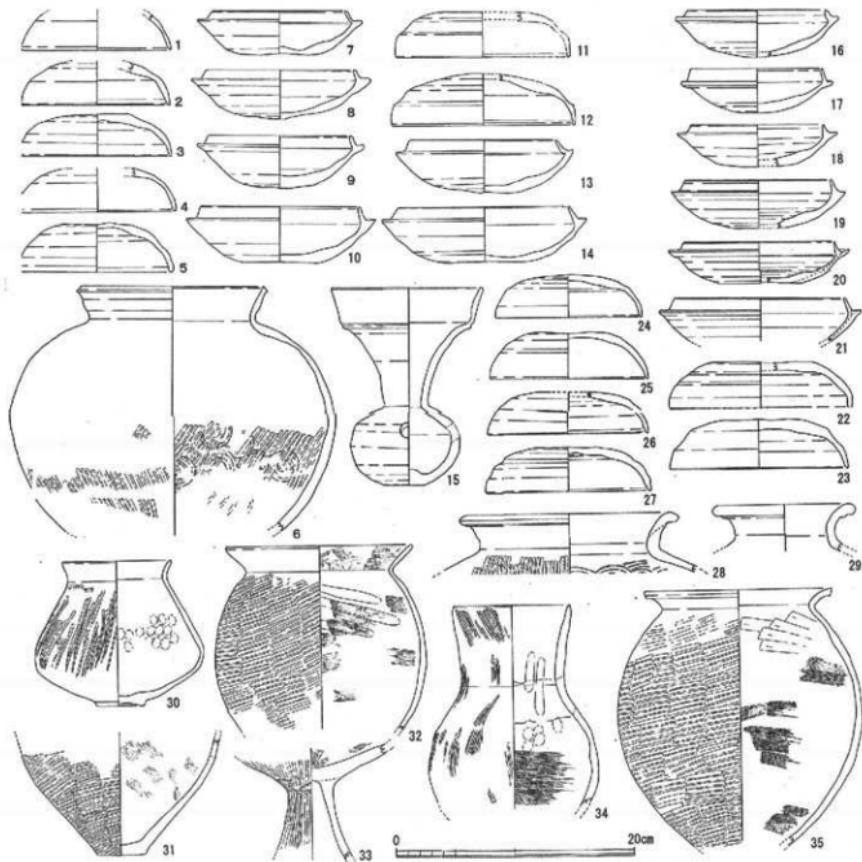
太田遺跡竪穴住居跡（SH-01）検出状況（北から）



太田遺跡竪穴住居跡（SH-01）土器出土状況（西から）



太田遺跡大型土壙 (SK-02) 土器出土状況 (東から)



太田遺跡出土土器 (1~8, SK-02出土・10 S P-22出土・11~14, SD-03出土・15, SK-05出土
・16~29, 遺物包含層出土・30~35, 整穴住居跡 SH-01床面上土塗一括出土)

目 垣 遺 跡

所 在 地	茨木市目垣三丁目284 - 1
調査原因	デイサービスセンター新築工事
調査期間	平成11年10月4日～11月5日
調査面積	約280m ²
調査担当	中東正之
調査結果	

目垣遺跡は、昭和48年の送電鉄塔建設に伴い発見された遺跡である。平成5年の共同住宅建設に先立つ調査では、弥生時代から中世に至る複合遺跡であることが判明した。その後、平成9年度と10年度の倉庫建設に先立つ調査で、弥生時代中期の集落域が確認されている。本調査地は、遺跡発見位置の南側に隣接する。平成10年12月、デイサービスセンター建設に先立ち、試掘調査を実施したところ、包含層が確認された。本調査地は、遺構面が深く、堆積土が軟弱であることは周知であったが、シートパイル（防水壁）を用いることが出来なかったために、検出面においては3.5m×30mの東西トレーン（調査坑）状の調査区となった。

当該地の土層の堆積状況は、現地表面から現代盛土層（70cm）、旧耕土（10cm）、無遺物層（60cm）、灰オリーブ粘土（約30cm中世包含層）と続く。以下は、植物遺体、炭化物、弥生土器を含む、黒色粘土（約10cm）、暗灰色粘土（約10cm）、暗灰色シルト（砂質土層）（約10cm）、暗灰色シルト（砂質土層）暗灰色混粘土（約10cm第1遺構面）、灰色粘土（30cm第2遺構面）が堆積し、暗青灰色粘土（地山層）に至る。

多量の湧水と壁面の崩落のため、第1遺構面を断念して第2遺構面で一括して遺構検出を実施した。地山層上面については、同じく崩落等のため、断面観察を実施したのみで、遺構の有無は確認できなかった。検出遺構は、溝状の落ち込み、溝1条、土壙2基、柱穴・小穴102個を数える。ほとんどが弥生時代中期前半にあたるものと考えられる。

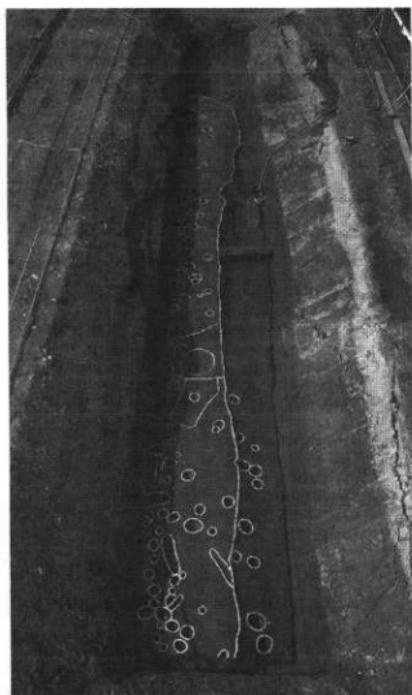
溝状の落ち込み（S X-1）は、調査区に沿って東西に走るもので、南側の溝肩のみが検出された。西部において、断面V字状の溝（S D-1）と重複する。S D-1埋土内からは、弥生時代中期前半～中葉（畿内Ⅱ～Ⅲ様式）の弥生土器が投棄された形で多量に出土した。重複部以西は、崩落のため、S X-1の方向すら掴めなかった。その他、土壙2基、柱穴・小穴は多数検出されたが、建物等としてまとめることはできなかった。

遺物は、弥生時代前期～中期後半（畿内Ⅰ～Ⅳ様式）の弥生土器、石器、中世土器などが出土した。弥生時代前期（畿内Ⅰ様式）の弥生土器はごく僅かで、弥生時代中期前半～中葉（畿内Ⅱ

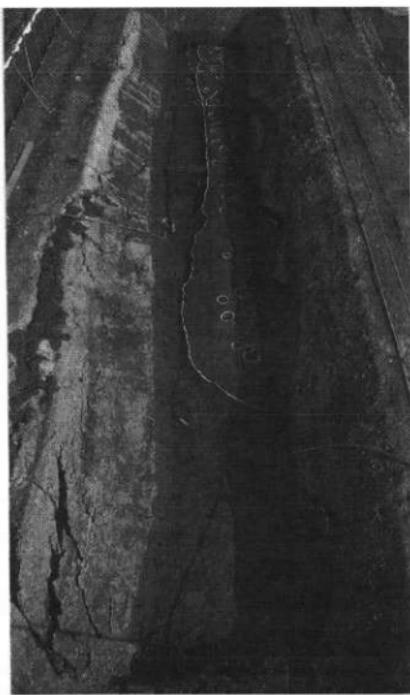


～Ⅲ様式）の弥生土器が大半を占める。弥生時代後期や古墳時代の土器は確認できていない。遺物の総量は、整理箱40箱を数える。

調査の結果、当該地では、弥生時代の中前期半頃の集落域が検出された。調査範囲が狭小なうえ、きわめて湿潤な地盤のため調査は困難を極めたが、幾度かの洪水による堆積が確認でき、そのつど遺構面を重ねていった状況が伺える。また、多くの弥生土器が良好な遺存状態で出土しており、集落の中心に近い地区であったと思われる。これまでの調査結果とあわせると、集落の推定規模は、弥生時代中期の居住城に限れば、拠点的集落である東奈良遺跡に匹敵する規模が想定される。しかし、湿潤な地形的条件下で、なぜこれほどの集落が成立したのか疑問であり、集落内には、未確認の、^築^{たて}高地上に成立した、安定した地区が存在したものと考えられる。また、^築^{たて}基域や環濠の存在、弥生時代後期以降の集落の衰勢など、不明な点が多く、今後の調査例の増加を待って検討したい。



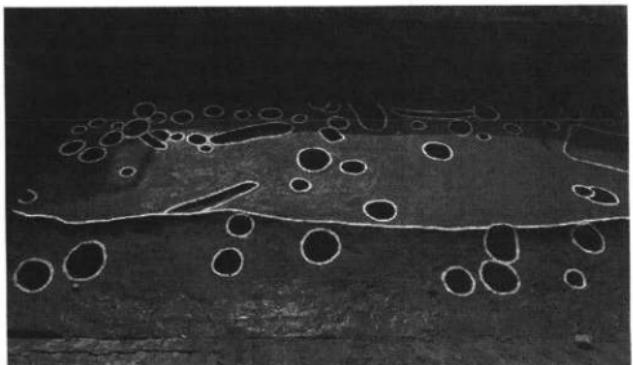
目垣遺跡遺構面全景（東から）



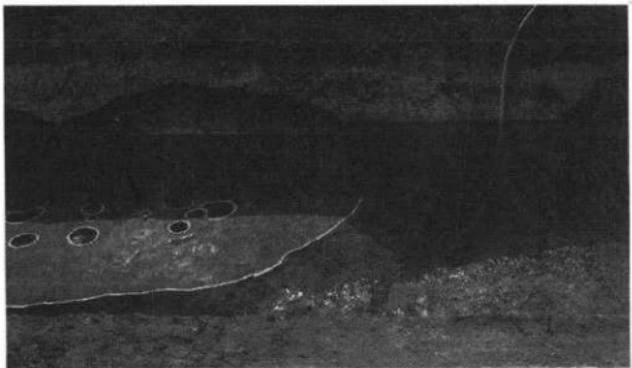
目垣遺跡遺構面全景（西から）



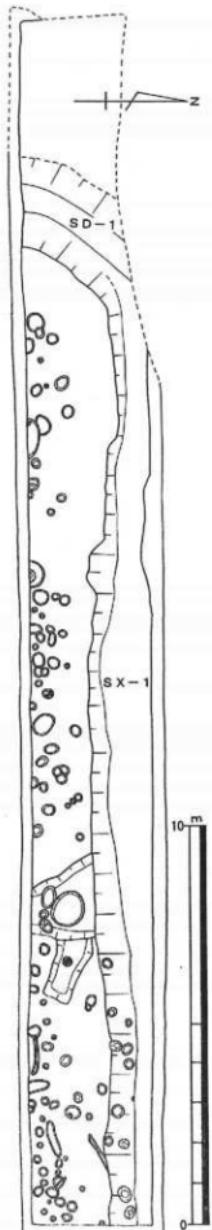
本調査地より北方を望む。左手前昭和48年度調査送電鉄塔、
中央平成10年度調査地区、右手平成9年度調査地区



目垣遺跡調査区東端部柱穴群検出状況



目垣遺跡調査区西部、SD-1・SX-1重複部検出状況



目垣遺跡遺構平面図

溝 昨 遺 跡

所在 地　茨木市学園町地内
開発事業　(仮称) 東地域体育館建設事業
　　　　　(仮称) 東コミュニティセンター
　　　　　(仮称) 東地域消防屯所
調査期間　平成11年2月15日
　　　　　～平成11年5月31日（1次）
　　　　　平成11年10月21日
　　　　　～平成11年12月15日（2次）
調査面積　1,838m²
調査担当　宮脇 薫
調査結果

調査地は、元浪商学園の移転跡地で、既に平成5年から平成10年にかけて（財）大阪府文化財調査研究センターによって発掘調査が実施された地域の北東に隣接している。そのセンターの平成9年の調査によって、安威川の対岸にある溝昨神社の上の宮とみられる遺構が、中世の前半から近世・近代まで続くことが報告された。

浪商学園当時はグラウンドであった調査地の現地表は西北から南東へなだらかに傾斜しており、地表下断面は12層がみられる。

第1層の盛土から水田の耕土、床土をへて数層あり、第9層からは5世紀後半～6世紀後半の須恵器・土師器が出土し、第10層の淡黄灰色細砂からは古墳時代前期の土師器・自然木の細枝がみられる。

その下層の淡黒灰色土の層に古墳時代前期の遺構が、さらにその下層に灰色粘土の弥生時代中期の遺構が検出された。この第11層、第12層は地表下約2.9m～3.1mにある。

古墳時代前期の遺構は調査区の北から東に斜めに横断する溝-1と北から南へ大きく蛇行する溝-2、及びその溝-2が調査区の北において東から西に流れを変える地点の左岸の部分のしがらみ状の遺構である。

溝-1内に堆積した淡灰色粗砂から古墳時代前期の土師器が整理箱に1箱出土した。

溝-2は調査区の中央部で西へ弧を描きながら2つに分かれ、南で合流している。溝内から古墳時代前期の土師器が出土した。

しがらみ状の遺構は、溝-2の左岸に沿うように丸太材や板材が斜めに打ち込まれ、隙間に土が詰め込まれていた。木材に焼けていたものがあり、他に使われていたものを転用したものと考えられる。

弥生時代中期の遺構としては、溝-3と土壙-1、土壙-2、土壙-3である。溝-3から弥



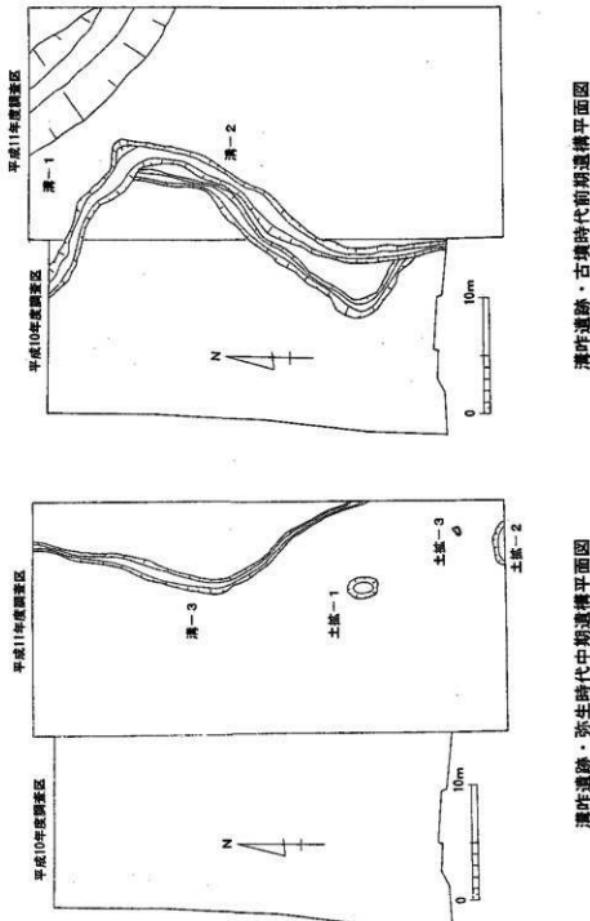
生時代中期後半の土器が約20点、土壤-1からは弥生時代中期後半の土器が5点出土した。

第10層において、洪水に伴うと考えられる淡黄灰色砂の堆積があり、その中に古墳時代前期の遺物が含まれていたことから、この頃に洪水に見舞われたことがわかった。

平成11年度の調査では、弥生時代中期の溝・土壤が検出されたことから、弥生時代中期には調査地を含めた周辺に集落が形成されていことが確認された。

鞋が検出されていないので、水田跡は確認できなかったが、自然地形を利用し、集落は高い地域に、低い地域には水田が営まれ、緩やかな傾斜の自然水路があることから、この調査地は集落域の雨水などの排水の役割を果たしていた地域と考えられる。

註1) 護岸用の土溜め等が考えられる。



宿久庄遺跡

所在地 茨木市藤の里二丁目1121-2他

開発事業 倉庫増築工事

調査期間 平成11年5月28日～平成11年6月7日

調査面積 12m²

調査担当 濱野俊一

調査結果

宿久庄遺跡は市域の北西部、勝尾寺川の左岸に位置する集落遺跡である。宿久庄遺跡の発見は、昭和50年府道茨木～能勢線の拡幅工事に伴って行われた発掘調査による。発掘調査の結果、弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物と遺構が検出された。以後、何度かの発掘調査が実施され、宿久庄遺跡が弥生時代後期から中・近世に及ぶ複合遺跡であることが判明している。しかしながら、宿久庄遺跡における大規模な発掘調査は、藤の里二丁目に所在する三菱倉庫側を中心とする一帯に限られており、遺跡の規模や性格については不明な点が多い。昭和59年度以降の、三菱倉庫側や大成化工側敷地内においての発掘調査では古墳時代後期の土壌や柱穴が検出されている。特に、平成3年度に実施されたゲンゼ株式会社の敷地内での発掘調査では平安時代後期から中世にかけての掘立柱建物6棟と権現門や土塙そして古墳時代後期の掘立柱建物1棟と落ち込みと溝や土壌が検出されている。また、宿久庄高松において採土中に奈良時代の蔵骨器が単独出土している。

今回の調査地点は、宿久庄遺跡の中央部に位置している。調査の結果、中世末から近世初頭の遺構面と古墳時代前期初頭から古墳時代後期・奈良時代を中心とする遺構面が2面検出されている。上層面では南北方向に流れる溝1条と土壌2基や柱穴が検出されている。上層面の遺構からの出土遺物は少なく、土壌内から唐津焼の碗が出土している。下層面では一辺約4m以上と考えられる竪穴住居跡(SB-1)1棟と不定形の大型土壌(SK-03)や小型の土壌(SK-04)等が検出されている。竪穴住居跡は壁溝の隅部は擾乱されていたが、壁と周壁溝の二辺の大半を検出できた。竪穴住居跡に伴う柱穴は検出されなかった。竪穴住居の床面に伴う遺物としては北東周壁溝と壁を中心に小型丸底鉢・二重口縁壺・甕等が出土している。また、同竪穴住居の覆土上面からは山陰系の鼓形器台や有孔鉢等が出土している。不定形の大型土壌(SK-03)は弥生時代後期から飛鳥・奈良時代までの遺物が混在して出土している。ただし、比較的残りの良い個体が多いことと、出土している遺物の時期が5世紀後半の須恵器・土師器に集中する傾向があることから、当該期の遺構を潰して遺物を破棄されたか、5世紀後半の遺構の上から飛鳥・奈良時代の遺構が形成されたかは土壌の堆積状況からは判断できなかった。また、小型の土壌(SK-

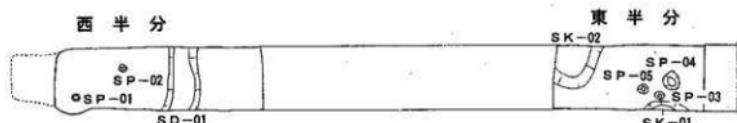


04) からは古墳時代後期の埴輪片等が検出されている。

まとめ

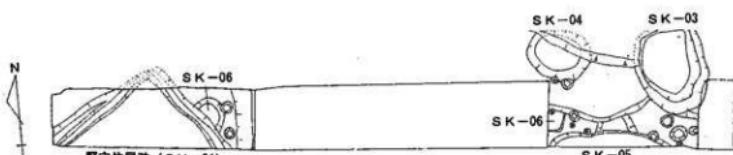
今回の発掘調査によって宿久庄遺跡の新たな性格が判明した。以下、それらを記すと下記の通りとなる。

1. 宿久庄遺跡において初めて竪穴住居跡が検出されたことがあげられる。竪穴住居の半分以上が擾乱と調査区外に延びているため正確な規模等は不明だが、壁の二辺を検出していることから一辺5~6mぐらいの竪穴住居に復元可能である。そして、竪穴住居の時期も床面から出土している小型丸底鉢等から古墳時代前期初頭の新しい段階に位置づけることができた。これまで、宿久庄遺跡においては弥生時代後期後半から活発な集落形成が出土土器から考えられてきたが、古墳時代前期初頭にも引き続いていることが判明した。これまで当該期の竪穴住居跡は市内では東奈良遺跡・郡遺跡・倍賀^{ヒカ}遺跡等で検出されているが、摂津地域においてはまだまだ当該期の竪穴住居跡の検出例はまだ少なく新しい類例が得られた。また、竪穴住居跡の覆土上面からは山陰系の鼓形器台が検出されており、古墳時代前期初頭における宿久庄遺跡の他地域との活発な交流を示す土器が検出されたことは重要である。
2. 宿久庄遺跡における集落の中心時期は古墳時代後期と中世と考えられてきたが、今回も古墳時代後期と中世から近世にかけての遺構・遺物が検出された。特に、平成3年度に当該地北西部のゲンゼ株式会社敷地内において実施された発掘調査で検出された平安時代後期の掘立柱建物等は検出されなかった。その代わり、今回の調査では一時代遡る飛鳥・奈良時代の遺構群が初めて宿久庄遺跡において検出されたため、古墳時代後期から連続と集落形成が行われたことが判明した。



宿久庄遺跡第1遺構平面図(中世～近世初頭)

0 5m



宿久庄遺跡第2遺構平面図(弥生時代～中世)

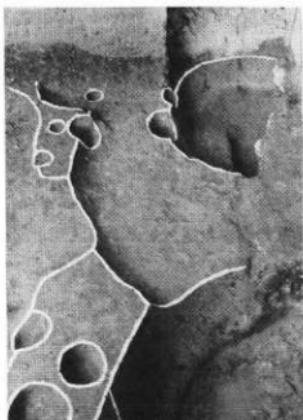
宿久庄遺跡遺構平面図



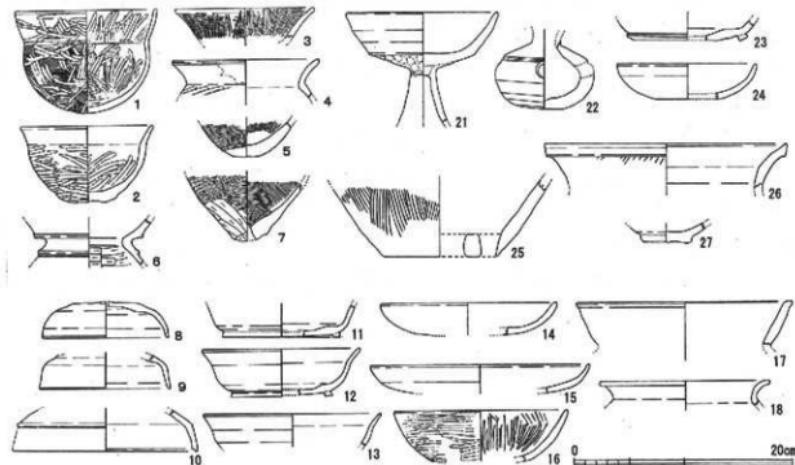
宿久庄遺跡第2遺構面西半分堅穴住居跡（SH-01）検出状況（北から）



宿久庄遺跡第2遺構面西半分掘削作業風景（西から）



宿久庄遺跡第2遺構面東半分遺構検出状況（東から）



出土土器 (1~5、堅穴住居跡SH-01床面土上出土・6~7、堅穴住居跡SH-01床面覆土内出土・8~24、SK-03出土
・21SK-04出土・25、SK-04出土・26、第2遺構面上包含層・27、SK-02出土)

宿久庄遺跡

所在地 茨木市豊川一丁目 418-1他

開発事業 研究施設棟建設事業

調査期間 平成11年6月10日

～平成11年8月4日

調査面積 1,200m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

調査地は、勝尾寺川と箕川との合流地点の北約300mの勝尾寺川の左岸にあり、対岸には「ぼろ塚」がある。調査地に既存の倉庫があり、その解体後に試掘調査を実施したところ、西半部において勝尾寺川の旧河道あるいは氾濫原と考えられる人頭大の河原石を含む疊層が認められ、包含層は確認できなかった。

東半部においては、古墳時代の遺物を含む包含層が確認された。

調査範囲は、建物建設予定部分の南北30m、東西40mを設定して行った。

地表下断面は、盛土が約60cm、水田耕土が約25cm、青黄色土（底土）が約15cm、黄褐色土（マングンを多く含む）が約20cm、褐色土（包含層）が約15cm、黄色砂礫（土山）である。

遺構は、柱跡が多く検出され、径が15～20cm、25～35cmに分類することができ、掘建柱建物としては2棟確認された。

調査区の東では、須恵器・土師器等の土器が集中して出土する部分があり、土器が一括廃棄されたものと思われる。この土器溜りの大きさは幅が約1m20cm、長さが約2m70cmである。

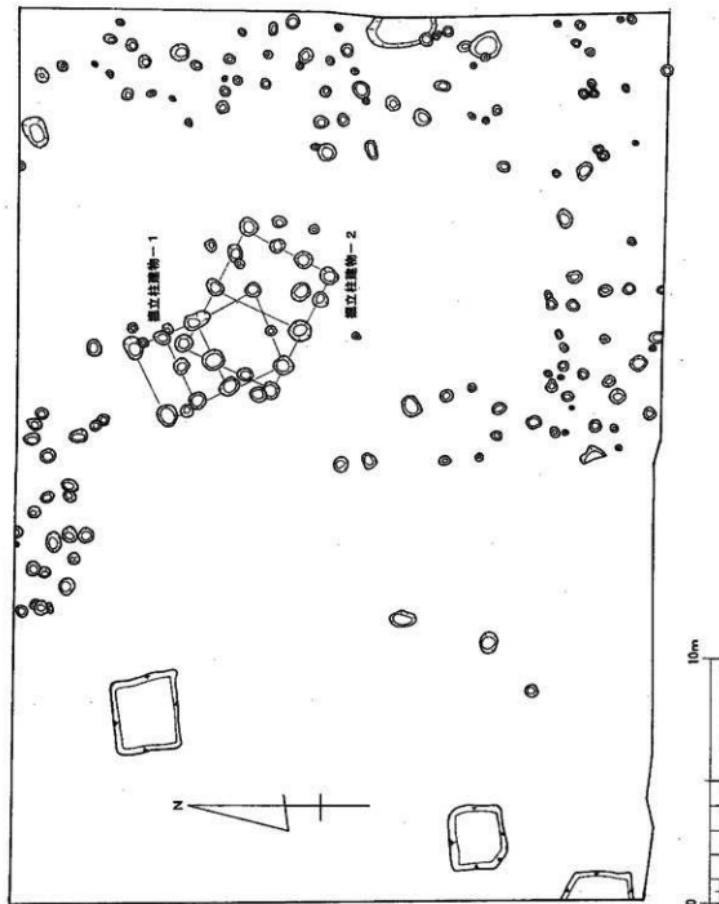
土器はほとんどが破片であるが、一部、杯身及び杯蓋の完形品も含まれている。

遺物は、滑石製の筋錐車が出土し、主として古墳時代後期（6世紀中頃～後半）の須恵器・土師器、また、少量ではあるが、中世の青磁碗、瓦器等の破片が出土しており、全部で整理箱に15箱出土している。

この調査で、勝尾寺川の左岸における古墳時代後期の集落の一端を確認することができた。



宿久庄遺跡遺構平面圖



中河原北遺跡

所在地 茨木市中河原町62

開発事業 駐車場付自動車修理工場建設事業

調査期間 平成11年6月10日

～平成11年7月25日

調査面積 500m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

調査地は、旧西国街道と府道茨木龜岡線の交差する中河原の交差点から南へ約200m下った地点に位置している。

地表下断面は盛土が約1m、水田耕土が約25cm、床土15cm、褐色土（包含層）5cm、黄色土（地山）である。



遺構としては調査区の南で地山を削って造られた、幅約1mの畦が東西の方向で検出された。その南側は畦より約10cm低くなっている、畦の下に径が約5cmの杭が5本あったことから、この畦は南に広がると考えられる近世から近代にかけての水田のものと思われる。

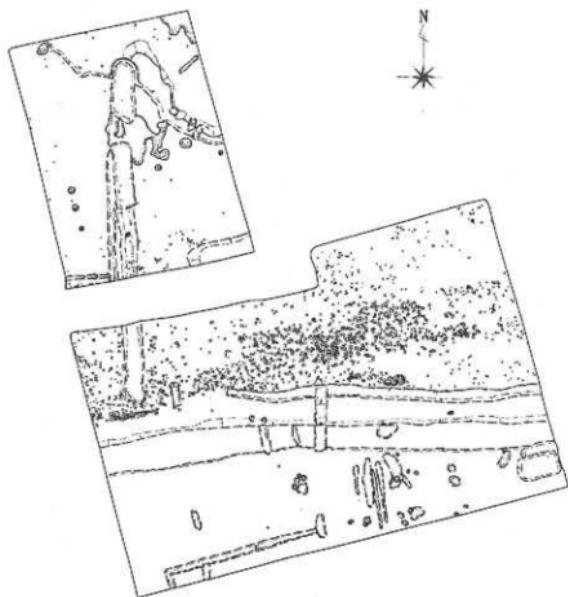
もうひとつの遺構は、畦の北にはほぼ平行して幅約7mのやや大きな自然石（礫）の石敷きが東西の方向で検出された。

幅が広いので道として考えてみたが、高槻市の島上郡衙近辺の石敷きの古代道路跡では道の部分が高く、側溝のある排水機能を備えたものであり、この石敷きでは両側に側溝がないこと、畦と水田面よりも低い位置にあること、また、石敷きされているのは郡衙付近だけとされること等から、この石敷きの遺構は、道としての可能性はあるが断定はできない。

その他の遺構は、径が25～35cmの柱跡及び幅が約25cm、深さ7cmの溝が途切れながら1条検出された。

調査区の東北において、落ち込み状の遺構が検出したが、第二次世界大戦の防空壕の跡であるとの住民の話で作業を中止した。

遺物は石敷きの上層からは古墳時代（6世紀後半）の須恵器・土師器・平安時代～鎌倉時代の黒色土器・瓦器が整理箱に5箱出土している。



中河原北遺跡遺構平面図



中河原北遺跡遺構検出状況全景（西から）

五日市東遺跡

所在地 茨木市南耳原一丁目83-1

開発事業 自動ラック倉庫建設

調査期間 平成11年11月29日

～平成12年1月21日

調査面積 1,891m²

調査担当 濱野俊一・中東正之

調査結果

五日市東遺跡は平成8年度の試掘調査によって新たに発見された遺跡である。当該地周辺の地形は茨木川と安威川が形成した末端扇状地及び冲積低地であり、同河川の旧流路と氾濫源と考えられてきた。そのことを裏付けるものとして周辺部の試掘調査の結果では、河川が形成した開拓谷を流れる旧河道跡と推定される分厚い砂の堆積層を確認している。
註1)

平成8年度の発掘調査では、幅6mのトレンチ（調査坑）調査で遺跡全体の様相は把握できなかったが、自然河道2条と大形土壙が1基検出された。この自然河道は弥生時代前期から古墳時代後期までの土器を含み中世段階には確実に埋没して集落の一端になっていたことが判明した。出土遺物としては中世の瓦器・土師器・須恵器・青磁・錢貨（祥符通寶・北宋錢）等を中心に出土している。また、自然河道の埋土内からは古墳時代後期のナスピ形罐や弥生時代前期の土器の出土は当該地近辺に集落の存在を考えさせるものであった。

今回の調査地点は平成8年度の調査地点の道路を挟んで北側に位置している。調査の結果、二時期の遺構面を検出した。上層面では、古墳時代後期から中世にかけての遺物包含層を調査区全域で確認したが、明確な遺構としては敷地の南東隅で平安時代後期と推定される溝を1条検出したにすぎない。下層面は、縄文時代晩期後半を中心とする遺構面である。

遺構としては、南北方向に流れる幅6mを越える自然河道1条（SR-01）そして同河道に流れ込む自然流路を1条（SR-02）検出した。この自然流路を中央に挟んで北側と南側において炭・燒土を含んだ大形落ち込み（竪穴式住居跡の可能性が高い・SX-01・02）2基（棟）を検出した。そして、この自然流路に流れ込む溝1条（SO-02）と不定形な流水痕跡を検出している。また、生駒西麓産胎土の深鉢に堅果類が詰まった土壙（SK-02）が1基検出されている。

出土遺物としては、上層面では古墳時代後期から中世にかけての土師器・須恵器・白磁・青磁・鐵釘等が出土している。下層面は縄文時代晩期後半を中心とする深鉢と浅鉢で大形落ち込みから集中してサヌカイト剥片と一緒に出土している。特に、北部の大型落ち込みからは、弥生時



代前期の壺または甌の破片が縄文時代晚期後半の深鉢・浅鉢と一緒に出土した。このため、近畿地方の縄文時代晚期後半と弥生時代前期前半のつながり方を知る新しい材料を得ることができた。自然河道からは、縄文時代後期を中心とした土器が出土しており、ほとんどが摩滅した状態のため北方に位置する耳原遺跡から流入したものと思われる。土器以外にはサヌカイト製の打製石匙等が出土している。また、自然遺物としては自然河道の埋土下層～最下層から当該期の自然景観を知ることができる巨大な自然木（ケヤキ）や木の実等が出土している。上記以外に、特徴的な遺物としては和歌山県または徳島県から搬入された結晶片岩の原材が出土しており、石棒を製作していくことがあげられる。

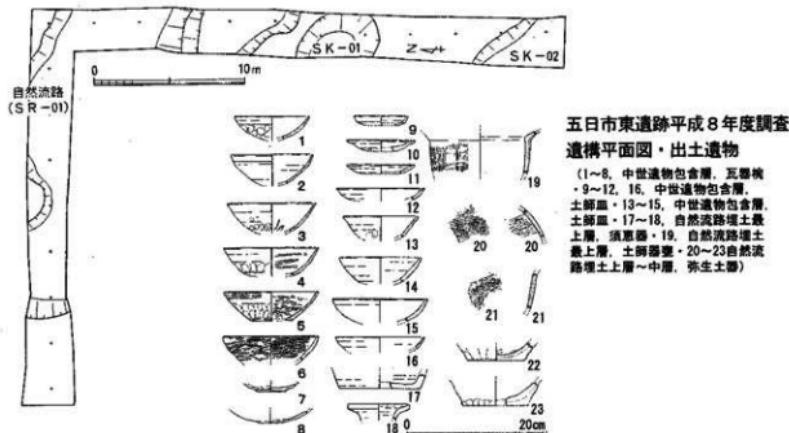
まとめ

今回の調査によって、従来考えられていた五日市東遺跡が北東側に広がることが判明した。特に、縄文時代晚期後半の遺構・遺物群は当遺跡の北に位置する耳原遺跡との関係を密接に物語るものとして、中河内の生駒西麓産胎土の突帯文土器の搬入率の高さがあげられる。耳原遺跡での調査では生駒西麓産胎土の土器が76.5%という高率を示しており、当遺跡も生駒西麓産胎土の土器が7割近く認められる。また、耳原遺跡以外の三島地域の縄文時代晚期後半の集落及び西摂地域の伊丹市口酒井でも生駒西麓産胎土の突帯文土器の搬入率の高さが指摘されている。^(註3)五日市東遺跡の北部の大型落ち込みから出土した弥生時代前期の土器とこの突帯文土器と共に出土したことは三島地域の稻作受容期の様相を示すものと思われる。また、打製石器類は二上山サヌカイトが主流を占め、一部、香川県金山産と推定されるサヌカイトが認められる。そして、結晶片岩の出土は集落内の石棒の生産を考えさせ、生駒西麓産胎土の突帯文土器とともに三島地域と他の地域間との交流を考えるのに重要な資料を提供することになった。

註1) 浸食によりV字状に切り込んだ谷

註2) 勘元興寺文化財研究所の樹種鑑定による。

註3) 『昭和61・62年度高槻市文化財年報』森田克行「三島地方の縄文土器」1989年4月高槻市教育委員会



五日市東遺跡平成8年度調査自然流路堆土上層出土ナスピ形鉢実測図



五日市東遺跡平成8年度調査中世遺物包含層出土銭貨
(算符通寶・初鎌年1009年)



五日市東遺跡調査区全景（西から）



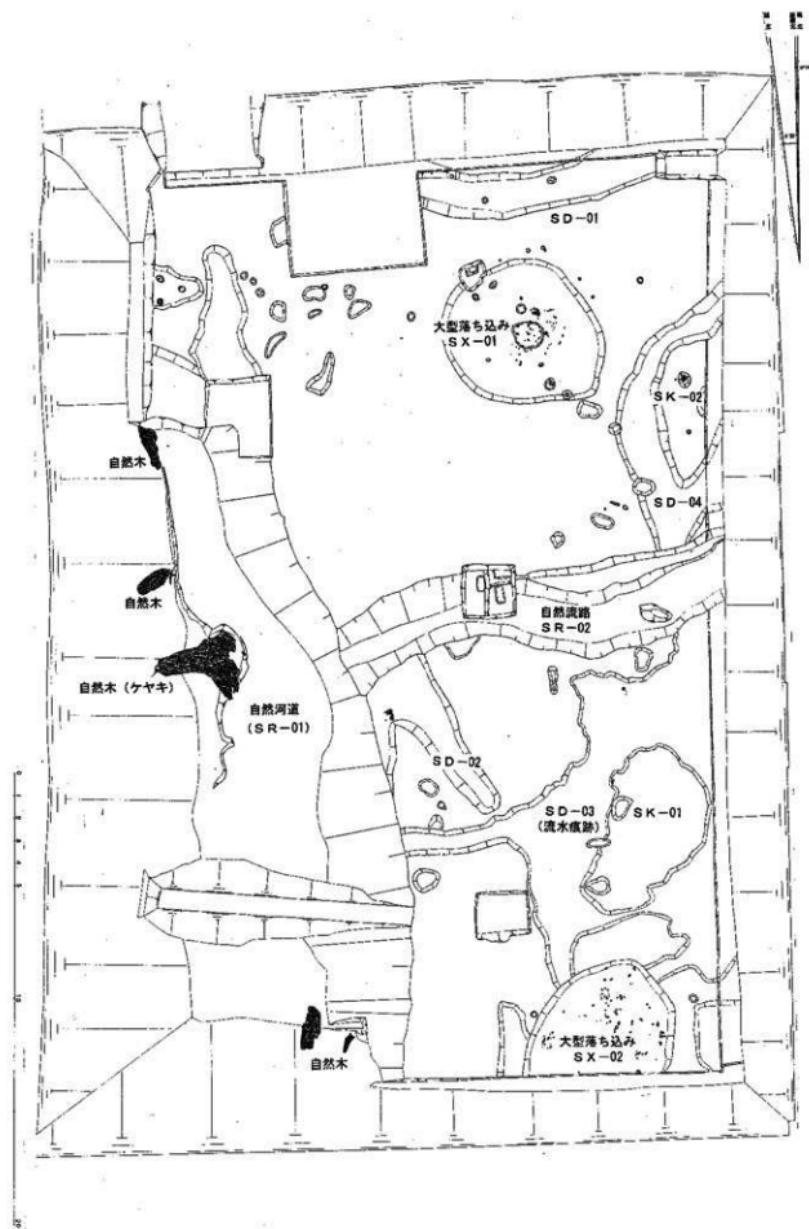
五日市遺跡調査区全景（北から）



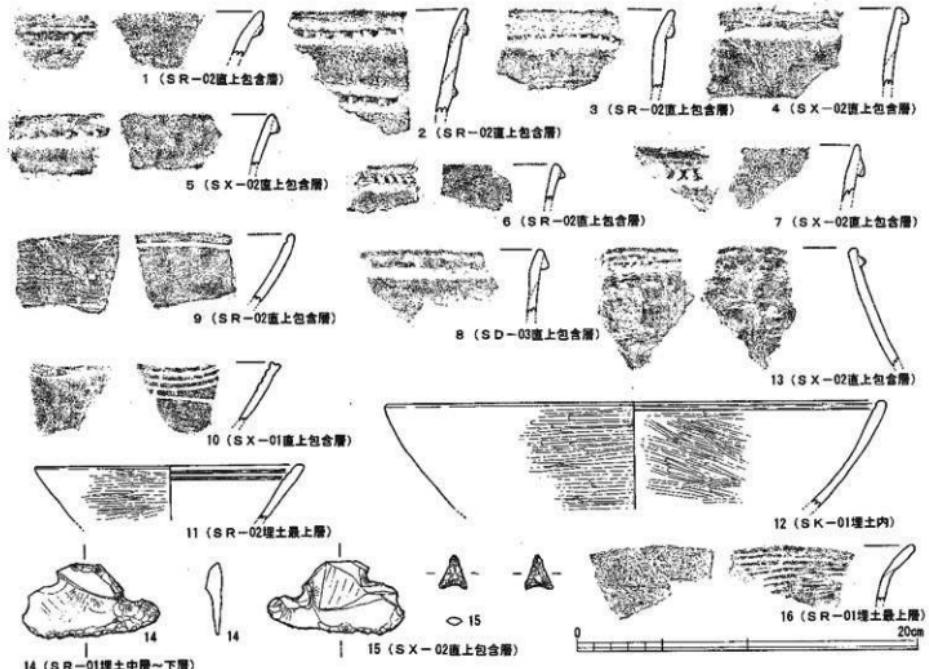
五日市東遺跡SK-01縄文時代晩期深鉢・堺果類出土状況（西から）



五日市東遺跡SD-02縄文時代晩期深鉢出土状況（西から）



五日市東遺跡遺構平面図



五日市東遺跡出土遺物実測図 (1~8・16. 深鉢・9~12浅鉢・13. 瓦・14. 石匙・15石鏃)

平成11年度発掘調査概報

発行日 平成12年3月31日

発行 茨木市教育委員会

印刷所 西村印刷株式会社